

第三十四回 五丈原ごじょうげんにて諸葛星ほしを禳はらう、大星隕たいせいおちて漢じょうしやうの丞相しやうしやう 天てんに帰かへる

— 星落ほしつ 秋風しゅうふう 五丈原ごじょうげん —

(前回から今回まで)

前回、諸葛亮こうこくに葫蘆谷ころうこくにおびき出され、絶体絶命の窮地に追い込まれた司馬懿すまぎは、その後は二度と出撃しようとはしませんでした。そこで諸葛亮は、司馬懿すまぎに女の頭巾ずきんと喪服もふくの白装束しろしょうぞくを贈つて司馬懿を挑発てうはつします。

(本文抄)

さて、諸葛亮はみずから一手の軍勢を率いて五丈原ごじょうげんに駐屯し、しばしば戦いを挑ませたが、魏軍はいっこうに出撃しない。そこで諸葛亮は巾幗きんかく(女性用の髪かざり)と女性用の喪服もふくを持つて来させ、大きな箱に入れると、手紙を一通したため、魏の陣営にとどけさせた。

諸将は隠しておくこともできず、使者を司馬懿のところに通した。司馬懿がみんなの前で箱を開いてみたところ、なかには巾幗と女性用の喪服、および手紙一通が入っていた。司馬懿が開封して読んだところ、そこには、あらましよう記しるされていた。

「仲達ちゆうたつ(司馬懿の字) どののは総大将として、中原の軍勢を統率しておられるにもかかわらず、鎧よろいをつけ武器をとって、雌雄しゆうを決しようとはなさらず、守ることに汲々きんかくとされていきます。これでは婦人とどこが違われませんか。ここに、使者を遣わして巾幗きんかくと喪服をおとどけます。もしも出陣なさらぬというのであれば、これをお納めください。ひよつとして、まだ恥を知る心が残っており、男子の氣概きがいがあるというのであれば、すみやかに返答され、期日を約束して対決いたしましょう」

司馬懿は読みおわると、心の中では腹を立てたが、そのような素振りそぶりは見せず、「孔明どのは私を婦人扱いするのか」と言うと、その場でこれを受け取り、使者を丁重ていじゆうにもてなすよう命じた。

(解説)

諸葛亮は、女性用の頭巾と服を司馬懿に届けて挑発しますが、司馬懿はその挑発に乗ろうとしません。こうして、二人の虚々実々の駆け引きがはじまります。

そこで、司馬懿は使者に、諸葛亮の近況をたずねます。使者は、諸葛亮のハード・ワークぶりを司馬懿に話します。それを聞いた司馬懿は、諸葛亮の余命が長くないことを察します。

(本文抄)

司馬懿は使者にたずねて言った。

「孔明どののふだんの睡眠や食事、政務の忙しさはどんな具合か」

「丞相は朝早く起きられ、夜遅くまで政務を見られ、鞭うち二十以上の処罰は、すべて自分で取り扱われます。めしあがる量は毎日、数升すうしやう（二、三合）にすぎません」と使者。

「孔明どのの食べる量は少なく仕事は多忙だ。命は長くないぞ」と、司馬懿は諸将を顧みかえりて言った。

使者は辞去して五丈原ごじやうげんにもどると、諸葛亮につぶさに説明して言った。

「司馬懿は巾幗と女性用の喪服を受け取り、手紙を読むと、別に腹も立てず、ただ丞相の睡眠や食事、政務のお忙しさについてたずねただけで、軍事向きの話にはまったくふれませんでした。私がかくかくしかじかと答えましたところ、司馬懿は『食べる量は少なく仕事は多忙だ。命は長くないぞ』と申しました」

諸葛亮がため息をつきながら、「やつは私をよく知っている」と言った。

と、主簿の楊顛リョウテンが言った。

「丞相はいつもご自分で帳簿にまで目を通しておられますが、それは不必要だと心配しております。そもそも政治を行うには役割があり、上下の者はおたがいに職分を侵してはならないのです。

家を治める方法にたとえるなら、農耕は下僕に、炊事は下女にやらせなければなりません。そうすれば、家はすたれることなく、必要なことはすべて充足されて、一家の主人はゆったりと暮らし、穏やかに日々を過ごすことができます。もしもこれらの仕事をすべて自分でやれば、心身ともに疲れ、けつきよく何一つできずに終わるでしょう。これは、知恵が奴婢に劣っているからではなく、一家の主人としての道に反しているから、そんなことになるのです。

だからこそ、昔の人は、『座つたまま道を論ずる人物を三公と呼び、実行にたずさわる者を士大夫と呼ぶ』（『周礼』「考工記」）と言っているのです。昔、丙吉は牛が喘いでいるのを見て心を痛めながら、道路に死人が転がっていても、見向きもしませんでした。また、陳平は国庫の金銭や穀物の出納を知らず、『それは別に担当者がいます』と答えました。今、丞相はみずから些細な事まで処理され、一日中、汗だくになっておられますが、これではお疲れにならないがありません。司馬懿の言葉はまことに当を得たものです」

すると、諸葛亮は涙を流しながら、「私もそれがわからないわけではない。ただ、先帝から幼主を補佐する重任を授かったうへは、他の者が、私のように心を尽してくれるかが心配なのだ」と言ったので、配下一同も涙を流した。これ以後、諸葛亮は氣分の動揺を覚えるようになり、そのため諸將はあえて進撃しようとしなかった。

(解説)

あまりにも多くの仕事を一身に引き受け、しかもそれを几帳面にこなす仕事ぶりに、主簿の楊顛は、人にはそれぞれ職分というものがあるので細かいことには目をつむり、諸葛亮が些細な事まで処理しないよう進言します。それに対し、諸葛亮は、他のものでは私のように心を尽くさないことが心配だといいます。つまり、任せるに足る人が少ないということです。ここにも蜀の人材不足が影を落としています。晩年の諸葛亮には、彼以外に仕事を分かつことができないという労苦がつきまとっています。あまりにも能力がありすぎ、しかも誠実で几帳面であった諸葛亮は、強い責任感と使命感から多くの仕事を自分で処理しているので、こうして、諸葛亮は、激務と心労で体調を崩していきます。

(本文抄)

諸葛亮はため息をついて言った。

「私は気持ちが悪れ、病気がぶりかえしてしまつた。もう長くは生きていられないだろ
う」

その夜、諸葛亮は、病をおして外に出て天文を観察すると、非常に驚いた様子で陣幕のな
かにもどり、姜維きやういに言った。

「私の命は、もう明日をも知れない」

「なぜ、そのようなことをおっしゃるのですか」と姜維。

「三台星さんだいせい(北極星の近くにある上台・中台・下台の三星)のなかに客星が現れて、明るさを
増している。それに対して、主星は薄暗くなり、これをたすける星々の光も鈍にぶいので、自分
の寿命じゆみやうがわかつたのだ」と諸葛亮。

「たとえ天文がそうだとしても、丞相はなぜ祈祷きとうを用い、元にもどそうとなさらないのです
か」と姜維。

「私のもとより祈祷きとうの方法を知つてはいるが、天の意志がどのようなかかわからない。
おまえは四十九人の武装兵を率い、それぞれに黒旗を持たせ黒衣こくいを身につけさせ、陣幕を取

り巻いて守備するようにせよ。私は陣幕のなかで北斗星ほくとせいに祈祷きとうする。もし七日の間、主灯しゅとうが消えなければ、私の寿命は一紀いつき（十二年）、延ばすことができる。もし主灯が消えれば、私は必ず死ぬ。この間、無用の者をなかへ入れてはならない。必要な物は二人の小童しょうどう（召使いの少年）に運ばせよ」と諸葛亮。

おりしも八月 中秋ちゅうしゅうの季節であり、銀河が明るく冴さえわたり、玉露ぎょくろうはしたたり、旗さし物は微動みどうだにせず、夜回りも音をたてなかつた。姜維は四十九人を率いて陣幕の外に立ち、諸葛亮は陣幕のなかで香・花・供物くもつを並べ、地上に七個の大きな灯明とうみやうとそのまわりに四十九個の小さな灯明を並べ、中央に自分の命をつかさどる主灯を一つ置くと、祈りを捧げた。

（中略）

諸葛亮は陣幕のなかですでに六夜、祈祷きとうをつづけ、主灯が明るく輝くのを見て、心の中で非常に喜んでいた。姜維が陣幕のなかへ入ったとき、ちようど諸葛亮はザンバラ髪で剣をつき、北斗七星のかたちに歩みながら、將軍星を鎮しずめているところだった。そのとき突然、陣營の外で関との音が聞こえた。人をやつて見にいかせようとした瞬間、魏延ぎえんが慌あわただしく入つて来て報告した。

「魏軍が攻めて来ました」

魏延はずかずかと歩いてきた勢いで、主灯を踏み消してしまった。諸葛亮は剣を投げ捨て、ため息をつきながら言った。

『死生、命あり（人の寿命はあらかじめきままっている。『論語』顔淵篇の言葉）』だ。祈祷して変えられるものではなかった」

（解説）

星座を観察し死期が迫ったことを知った諸葛亮は、延命の祈祷を行ないます。真ん中に「主灯」が置かれ、七日間消えなければ十二年の命を永らえることができるのです。そして、明日がいよいよ満願という六日目の夜、魏延があやまって主灯を踏み消してしまったのです。『三国志演義』は、誠実無比な諸葛亮の姿を描くとともに、一方で祈祷で寿命を延ばすことのできる、超人的な力を持つ諸葛亮の姿を描いています。

日本人の心情には「超人的な諸葛亮」は受け入れ難いかして、日本では、そこに合理的な解釈を加えています。例えば、前回の「縮地の法」も吉川『三国志』では、影武者を用いて攪乱したことにしています。

しかし、「誠実無比な諸葛亮」と「超人的な諸葛亮」の並存は、中国人の世界観をよく表

しているように思います。中国の二大思想は「儒教」と「道教」ですが、それは互いに正反対の考え方です。秩序重視の「儒教的世界観」と混沌的な「道教的世界観」です。中国では、その二つの思想が並存してきました。日本では儒教は受け入れても、道教が流行することはありませんでした。「諸葛亮観」の違いにも、日本人と中国人の伝統的な心の在り様が反映しているのでしょう。

そういう意味で、中国で一番多く読まれてきた小説『三国志演義』は、中国人の思考様式を学ぶ上で最高の教材だと思えます。

しかしながら、諸葛亮が多くの人々を惹きつけるのは、その鮮烈な人生そのものにあるのはいうまでもありません。

『三国志演義』は、ここで、諸葛亮の最後の場面を描きます。諸葛亮は、姜維には自分の兵法の書と十本の矢を速射できる弩の設計図を手渡し、楊儀には魏延の謀反を見越して策を授け、また、自分の死を公表せずに司馬懿を欺くように言うなど、あとあとのことを細かく指示します。

(本文)

諸葛亮は一切の手配を終えようと、気を失って倒れた。夕方になって意識を取りもどすと、急いで後主（劉禪）のもとに使いを送った。

劉禪はこの知らせを聞くとびっくりし、すぐに尚書の李福を見舞いに向かわせた。李福は急いで五丈原に赴き、諸葛亮と会見して、劉禪の命令を伝えた。

見舞いの挨拶がすむと、諸葛亮は涙ながらに言った。

「私は不運にも道なかばでこの世を去り、国家の大事を成し遂げることができず、天下に申し訳なく思う。私が死んだあと、貴公らは忠義を尽くして主君を輔けてもらいたい。これまでの制度を廃止したり、私が任用した者を軽々しくやめさせてはならない。私の兵法はすべて姜維に伝授したから、私の志を継いで国家のために尽してくれるだろう。私はまもなく亡くなるから、これから遺言の上表文をしたため、天子に上奏しようと思う」

李福はこれを聞くと、慌てて辞去した。

諸葛亮は病軀をおし、左右の者に扶けられて小さな車に乗り込み、本陣を出て各陣営を見てまわったが、秋風が顔に吹きつけ、骨身に達する寒さを覚えると、ため息をついて言った。「ふたたび陣頭に臨み、敵と戦うことはできないのか。この蒼天よ、なんと無情なことか」しばらくため息をついたあと、陣中にもどったが、病状はにわか悪化した。

(※ここで諸葛亮は、劉禅への遺表をしたためます。)

諸葛亮は書きおえると、楊儀ようぎに申しつけて言った。

「私が死んでも、公表してはならない。大きな龜ずし(ひつぎ)を作つて、そのなかに私の屍しかばねを座らせ、米七粒を口のなかに入れて、足元に灯明とうみょうを一個置け。将兵はふだんどおり平靜にし、決して慟哭どうくの声をあげてはならない。そうすれば、私の魂が戻つて將軍星を鎮め、將軍星は落ちないはずだ。司馬懿は將軍星が落ちないのを見て疑うに違いない。わが軍は後方の陣営から、一陣營ずつゆつくりと退却せよ。もし司馬懿が追撃して来たら、きみは陣をかまえて待ち受けよ。やつが追いついて来たら、彫ほらせておいた木像もくざうを車に乗せて、隊列の前に押し出し、将兵を左右に分けて並ばせるのだ。司馬懿はこれを見れば、必ず驚いて逃げ出すだろう」

楊儀は一つ一つ承知した。

この夜、諸葛亮は人に支えられ、北斗星を仰ぎ見ながら、はるか彼方の一つの星を指さして言った。

「あれが私の將軍星だ」

一同が見れば、ふいにその星は暗くなり、ゆらゆらとして落ちそうになった。

と、諸葛亮は剣でこれを指し示し、口のなかで呪文を唱えた。唱えおわると、急いで陣幕のなかにもどるや、気を失ってしまった。

諸將が慌てふためいているところへ、突然、尚書の李福がもどつて来た。李福は諸葛亮が気を失っているを見ると、大声をあげて泣きながら言った。

「私は国家の大事を誤ってしまった」

まもなく、諸葛亮の意識がもどると、目を開いてあたりを見まわし、李福が枕元に立っているのを見て言った。

「貴公が戻つて来た理由はわかっている」

「私は天子より、これより先百年にわたり、誰に国家の大事を任せればよいか、丞相にお伺いするようにならわけていたのを、慌てていたために失念してしまい、それゆえ、もどつてまいった次第です」と李福。

「私の死後は、蔣公琰（蔣琬のあざな）に任したらよい」と諸葛亮。

「公琰のあとは、誰に」と李福。

「費文偉（費禕の字）がよからう」と諸葛亮。

「では、文偉のあとは、誰がよろしいでしょうか」と、李福はさらにたずねたが、諸葛亮は

答えない。

諸將が近づいて見ると、すでに息絶えていた。時に建興十二年（二三四）秋八月二十三日、
きようねん
享年五十四歳。

（解説）

劉禪の使者李福は、大事なことを聞き忘れていた、と引き返してきます。

李福は、諸葛亮の死後、百年にわたる国家の執政を誰に委ねればいいのか、と問いかけます。そこで、諸葛亮は、蔣琬が適任だといいます。李福がその次はと問うと、費禕なら継げると諸葛亮。さらにその次はと問うた時には、すでに諸葛亮は息絶えていました。

この個所を、『三国志』楊戲伝ようぎに引く注「益部耆旧雜記」えきぶききゆうざつぎには、次のように書いています。諸葛亮は戻ってきた李福に向かって、あなたが尋ねる後継者には蔣琬が適任だといい、重ねて次はと問う李福に、蔣琬の後は費禕に継がせよと答えます。李福はさらにその次はと問うと、諸葛亮は答えなかつたとあります。つまり、諸葛亮は、その次が答えられなかつたのです。それから先は、さすがの諸葛亮も運を天に任せるしかなかつたのでしよう。

蜀の人材不足の課題が、ここでも諸葛亮に重くのしかかっているのです。国力の貧弱な

蜀に人材が集まらなかつたのか、それとも、人材を育てることができなかつたのか。いずれにしても、人材の欠乏けつぼうは、諸葛亮でもいかんともすることができなかつたのです。

(本文抄)

夏侯霸かこうはが軍勢を率いて五丈原に到着してみれば、人つ子ひとり姿が見えないので、急いでたちもどり、司馬懿に「蜀軍はすでに全員、撤退しました」と報告した。

と、司馬懿は地団駄を踏んで言った。

「孔明はほんとうに死んでいたのか。すみやかに追撃せよ」

「軽々しく追撃されてはいけません。誰か部将を派遣すべきです」と夏侯霸。

司馬懿は「いや、私が自分で行く」と言い、軍勢を率い息子二人しほし(司馬師・司馬昭)しほしょうを同行させて、いっせいに五丈原に殺到した。

関とぎの声をあげ旗をひるがえしながら、蜀の陣営に突入したところ、はたせるかな、人つ子ひとりいない。司馬懿は息子たちを顧みて言うには、「おまえたちは、あとから全軍を駆り立てて追ってこい。私は先に進撃する」

そこで、司馬懿はみずから軍勢を率いて先頭に立ち、山の麓ふもとまで追いかけると、間近に

蜀軍が見えたので、力をふるって追撃した。

そのとき、突然、山かげから石火矢いしびやの音が一発鳴り響き、どつと関の音があがつたかと思うと、蜀軍がいつせいに旗を返し太鼓を打ち鳴らして反撃して来た。木々のなかには大旗がひるがえり、なんと「漢丞相武郷侯諸葛亮」と大きな字で記されているではないか。

司馬懿はあつと驚いて顔色を変え、目を凝らして見ると、数十人の大將が一輛いちりようの四輪車を囲んで姿を現した。四輪車には、綸巾りんきんに羽扇うせん、鶴氅かくしように黒い帯のいでたちで、諸葛亮が座っている。

司馬懿は仰天し、「孔明はまだ生きていたのか。私はうっかり深追いして、罨にはまってしまった」と言うや、急いで馬首をめぐらし逃げ出した。その背後から、姜維が大声で呼びかけた。

「逆賊、待て。おまえは丞相の計略にはまったぞ」

魏軍の将兵は肝きまをつぶして、鎧かぶとを脱ぎすて、武器を投げ捨てて、それぞれ必死で逃げ、たがいに踏みしだきあつたため、数えきれないほどの死者が出た。

(中略)

二日後、土地の住民がやって来て報告した。

「蜀軍は谷の中に入ったあと、はげしく泣き声をあげました。諸葛亮はやっぱり死んでおり、ただ姜維だけが一千の軍勢を率いてしんがりを受け持っていたのです。あの日、車に乗っていた諸葛亮は木像でした」

司馬懿は嘆息して言った。

「生きている人間なら計略にかけることもできるが、死んだ者ではどうにもならぬ」

これによって、蜀の人々は、「死せる諸葛、生ける仲達ちゆうたつ（司馬懿の字）を走らす」と言いはやすようになった。

（解説）

有名な「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」の名場面です。蜀軍の退却を知った司馬懿は、これを追撃しますが、諸葛亮の木像を見て畏にかかったと思ひ込み、慌てて逃げ出します。司馬懿は諸葛亮に何回も痛い目にあわされていたので、彼への恐怖心が染みついていたので、しです。

蜀軍が退却したあと、五丈原の陣営あとを観察した司馬懿は、諸葛亮を「天下の奇才である」と絶賛します。

前に諸葛亮の北伐の行程をGoogle Mapで紹介しましたが、成都から五丈原までは七七五キロ、獲得標高四九、八一六メートル、険峻な秦嶺山脈を越え、物資の補給も困難をきわめ、しかも激烈な戦闘をおこないながら、六年間に六回も往復します(『三国志演義』)。それを、三国で一番弱小、国力は魏の九分の一(『三国志』諸葛亮伝の注「黙記」)の蜀が行うわけですから、諸葛亮の確固たる意志が伝わってきます。

また、政治家としての諸葛亮の姿勢を見ると(『三国志』諸葛亮伝、井波律子訳、ちくま学芸文庫)、

「諸葛亮は丞相になると、民衆を慰撫し、踏むべき道を示し、官職を少なくし、時代にあつた政策に従い、まごころを開いて、公正な政治を行なつた。忠義をつくし、時代に利益を与えたものは、仇であつても必ず賞を与え、法律を犯し、職務怠慢な者は、身うちであつても、必ず罰した。罪に服して反省の情をみせた者は、重罪人でも必ずゆるしてやり、いいぬけをしてごまかす者は、軽い罪でも必ず死刑にした。善行は小さなことでも必ず賞し、悪行は些細なことでも必ず罰した。あらゆる事柄に精通し、物事はその根源をただし、建前と事実が一致するかどうかを調べ、うそいつわりは、歯牙にもかけなかった。かくて、領土内の人々は、みな彼を尊敬し愛した」と書いています。

政治家としての諸葛亮は、公平な政治を心がけ、そのために信賞必罰しんしょうひつぱつに徹しています。

また彼は、自分に敵しく身を処しました。

晩年の諸葛亮の財産は、成都にある桑八百株とやせ田十五頃げ、それで家族の生活は十分、死後に余分な絹やあまった財産を持つことはしないといい、死後、その言葉通りであったことが『三国志』諸葛亮伝に記されています。

諸葛亮伝の注に引く「袁子えんし」には、諸葛亮が亡くなって数十年経っても、蜀の人々が歌を作って彼を思慕しぼする様子を書いています。蜀の人は、諸葛亮の公平無私の姿を、亡き後も慕い続けたのです。

諸葛亮は、その五十四年の壮烈な人生を五丈原で閉じます。臨終を迎える寸前まで、諸葛亮の戦いは止むことがありませんでした。その確固かっこたる意志が、死後であっても「死せる孔明、生ける仲達ちゆうたつを走らす」という結果を生んだのでしよう。

この後、蜀が魏によつて滅ぼされるのは、三十年後のことです。こうしてみると、諸葛亮の北伐は結果的には失敗に終わりましたが、座して滅ぼされるを待たず、先手を打って北伐に打って出て、弱小な蜀の命脈めいみやくを永ながらえさせたと見ることもできます。